

『伽婢子』における典拠の再生

——〈批判〉の独自性をめぐって——

ロ シュンイ
廬 俊偉

一. 先行研究及び問題意識

『伽婢子』（1666年刊）は浅井了意が中国の『剪灯新話』（瞿佑著、1378年成立）、『剪灯余話』と『五朝小説』（魏・晋・唐・宋・明の小説を収めている）、朝鮮半島の『金鰲新話』（金時習著、『剪灯新話』による翻案作、1465年頃成立）を翻案した怪異小説である。張龍妹氏は「東アジアにおける『剪灯新話』の受容——文人意識の継承と変質」という論文の中で、『剪灯新話』巻一の一「水宮慶会録」には作者瞿佑の中国明朝初期の厳しい文人政策に対する批判が読めるのに対して、『伽婢子』巻一の一「竜宮の上棟」には文章道の衰退への風刺が込められ、直接の典拠である朝鮮の『金鰲新話』「龍宮赴宴録」よりも、中国の「水宮慶会録」の主題を全面的に受け継いでいる、と述べている^①。『剪灯新話』には確かにそういう文人意識が読めるが、浅井了意は中国文人瞿佑の批判意識をどれぐらい理解しているのかについて、発表者は疑問を持っている。だが、『伽婢子』には〈批判〉がないとは言えない。巻一の二「黄金百両」、巻四の一「地獄を見て蘇」、巻七の二「廉直頭人死司官職」には人々を虐げる地頭・代官に対する〈批判〉が見られる。ただし、それを批判と認めるか、或いはただの教訓に留めるかについて、先行研究にも議論がある。松田修氏は「批判的リアリズム」、すなわち当時の社会現実に対する批判として高く評価している^②が、花田富二夫氏は『智恵鑑』『清水物語』『大仏物語』などにおける教訓的要素を指摘し、「このことは『伽婢子』『浮世物語』の教訓批判精神が、こ

れら仮名草子群と同じ土壤に根ざしているのを示しているものであり、当時の一般的な認識であったに過ぎないとも言える」^③と述べ、松田氏と正反対の説を持っている。地頭・代官に対する〈批判〉はともかく、発表者は今回先行研究にまだ論じられていない権力者たち、武田信玄などの戦国武将への視点に注目しようと思う。また、張龍妹氏の指摘は『剪灯新話』とその翻案作をめぐって、中・日・韓における権力者〈批判〉の違いを検討することの必要性を示している。本発表は張龍妹氏の指摘から出発し、『伽婢子』における〈批判〉の独自性を探ることを試みる。

二. 『剪灯新話』 卷一の一「水宮慶会録」及びその翻案作をめぐって

『剪灯新話』 卷一の一「水宮慶会録」は、文人余善文が竜王の誘いによって竜宮へ行き、竜王の新しい宮殿に上梁文を書き、その文才がほめられ、竜宮の宴会に出席し、竜王から褒美を賜った話である。話の冒頭部分に「至正甲申ノ歳、湖州ノ士人余善文於_テ所居_ニ白昼閑坐……善文亦夕_{以テ}白衣ヲ_シ、坐_ス於_ニ殿角_ニ」^④とあるように、主人公余善文は「白衣」を着る、「白昼閑坐」の無職の下級文人で、その才能は現実社会で認められない。これに対して、竜宮で文才が高く評価され、竜宮が彼にとっての理想郷であることが分かる。また、張龍妹氏の指摘によると、『剪灯新話』が成立する四年前に、上梁文に関わる注目すべき事件が起こった。それは蘇州の知府魏観が最高権力者皇帝朱元璋の元ライバルであった張士誠の邸宅跡に官邸を建てたことで災いを招き、その官邸に上梁文を書いた有名な文人高啓も、文中に「竜^{わだかま}蟠^{うずくま}リテ虎踞^ル」^⑤という言葉を用いたために腰斬された事件であった。当時の文壇を驚かしたこの事件から、皇帝朱元璋が文人に厳しい制限政策を取ったことが窺える。張龍妹氏は、瞿佑はこの事件を「水宮慶会録」の背景とし、文人の才能が認められない社会の現実を歎き、竜宮のような理想郷に憧れ、当時の文人政策を批判している、と述べている。「水宮慶会録」の主題は確かに氏の指摘どおりと思われる。これは『剪灯新話』のほかの作品からも窺える。例えば、卷四の三「修文舎人

伝」は、文人夏顔は文才を持っているが認められず、憂鬱のまま死んだが、冥府で才能が認められ、修文郎という官職につき、友人は夏顔の幽霊からこの事を聞いて、冥府の官職につくため、病気を直さないことを決めた話である。夏顔の友人が自分の命を捨てたのは、どうせ現実社会で才能が認められないので、むしろ死んで冥府で官職についたほうがいいと思ったからである。これは明らかに現実社会に対する風刺と批判であろう。

『金鰲新話』の「龍宮赴宴録」は「水宮慶会録」の翻案作であり、原典より詳しく宴会の場面を描き、また竜宮見物の場面を加えている。張龍妹氏の指摘によると、「龍宮赴宴録」の主人公は「前朝に韓生という者あり、少くして文を能す、朝廷に著れ、文士を以て之を称す（前朝有韓生者、少而能文、著於朝廷、以文士称之）^⑥」とあるように、現実社会でも才能が認められた人なので、竜宮の理想郷としての意味がなくなり、現実批判が読み取れなくなった。実は、「龍宮赴宴録」にも別の現実批判、すなわち李氏朝鮮の世祖の王位篡奪事件への批判が読めると思われる。作者金時習は小さい頃から神童と言われ、文才が端宗に認められたが、20歳の時、世祖が甥である端宗の王位を篡奪する事件が起こり、金時習は世祖の即位を認めず、一生世祖に仕えないと決心して、出家した。「龍宮赴宴録」には、「寧ろ尾を泥途に曳くも、廟堂に藏ることを願わず…幾年の孤憤銀鳥を翻す、今日歡を同にして玉觴を舉ぐ（寧曳尾於泥途兮、不願藏乎廟堂…幾年孤憤翻銀鳥、今日同歡舉玉觴）」という漢詩がある。「泥途に曳く」ことは隱棲生活の喩え、「廟堂に藏る」のは朝廷に仕える喩え、「幾年の孤憤」は世祖の王位篡奪に対する憤懣と思われる。この漢詩は、世祖に仕えるより、むしろ隱棲生活を選んだほうがいい、何年も孤憤を抱えて月日を過ごし、今日は酒を飲むことで晴らすという意味であり、世祖に仕えない決意を示すと同時に、世祖の王位篡奪への批判を憚らない。ほかに、「酔遊浮碧亭記」からも同様の批判を窺うことができる。先行研究では、趙賢姫氏が『金鰲新話』の「萬福寺携蒲記」における漢詩から^⑦、蘇仁鎬氏が『金鰲新話』成立の時代背景の考察を通じて、金時習の批判意識を述べている^⑧。

『伽婢子』巻一の一「竜宮の上棟」は直接的には了意が『金鰲新話』の「龍宮赴宴録」を翻案した作品であり、部分的に『剪灯新話』の「水宮慶会録」を利用している。話の冒頭部分に、

後^ご柏^{かし}原^{はらの}院^{いん}の朝、永正年中に、滋^し賀^が郡^の松^ま本^{かみ}といふ所に真^ま上^{かみ}阿^あ祇^き奈^な君^{ぎみ}といふ人あり。もとは禁中に伺公して、文章生の官職にあづかりし人なれども、世の忽^{かふり}劇をいとひて、冠をかけて引きこもり、此所にあとをとゞめ、ころしづかに月日をぞ過ごされける^⑨。

とある。時代設定は「後柏原院の朝、永正年中」、つまり1504-21年の間であることを示している。江本裕氏の統計によると、『伽婢子』68篇の話のうち、17篇は時代設定が明記されておらず、他の51篇には、時代が応仁の乱（1467年）の前に設定される話が6篇あり、残った45篇が1467年から1592年までの間に設定され、ほとんど日本の戦国時代の範囲内にある^⑩。本話の時代設定も戦国乱世の範囲内にあり、本文にも「世の忽劇をいとひて」とあって、乱世であることを示している。主人公はもと文章生であるが、乱世を避けるために、官職を辞め、隠棲生活を始めた。「水宮慶会録」の主人公と同じく、現実社会では、才能と努力相応の待遇を受けることができない人である。だから、才能を適切に使えば認められる竜宮は真上阿祇奈君にとっても理想郷であろう。「竜宮の上棟」にも竜宮のような理想郷への憧れが見られる。

三. 乱世における権力者への視点

では、了意はなぜ「竜宮の上棟」を通して、理想郷への憧れを示すのかというと、やはり『伽婢子』における権力者〈批判〉の意味に繋がっていると思われる。話は「竜宮の上棟」から外れるが、『伽婢子』の他の作品における権力者〈批判〉を見れば、「竜宮の上棟」における竜宮の寓意が分かるだろう。『伽婢子』に登場する回数の最も多い（注⑩江本裕氏の著書による）権力者、武将

武田信玄を例にして見よう。巻六の三「遊女宮木野」に武田信玄が登場している。宮木野は駿河の国の有名な遊女であり、後に藤井清六に嫁ぎ、夫婦睦まじく暮らしている。清六は上洛する間に、諸国に争いが勃発するため、故郷に戻れないようになった。まもなく信玄が駿河を攻める戦乱が起り、宮木野は貞節を守るために自殺し、彼女の幽霊は清六に会って自分が男子に転生することを知らせた話である。これは原典『剪灯新話』巻三の四「愛卿伝」と同じく、戦乱に翻弄される夫婦の話である。この話の中に、

永禄十一年武田信玄駿州に発向して府の城にとりかけ、民屋に火をはなちて焼たてければ、今川氏真は落うせらる。武田方の軍兵家へにみだれ入いりて、乱妨分捕らんぼうぶんどりして狼籍らうぜきいふはかりなし。

とあり、当時の戦乱の残酷さ、武田軍の乱暴さを描いている。これは原典における「至正十六年張士誠陥レ平江ヲ（中略）不レ戢二軍士ヲ、大ニ掠ス居民ヲ」という場面を翻案したのである。また、この戦いの後、駿河に帰った清六は、宮木野の死を知って、「されば久しく音づれの絶しもわが咎ならず。心にまかせぬうき世のわざ也」と言っている。この話は原典に見えない、了意の生の声である。これは了意の、戦乱という憂き世に生きる人たちの不幸な運命に対する歎きを示している。

ほかに、巻十二の五「盲女を憐て報を得」にも武田信玄が登場している。信玄が駿河を攻めた後、戦火に焼かれた町に、家族に死なれた盲目の女の子がいて、隣家のやもめの女房は盲女を引き取ったが、盲女は絶食して死んだ。女房は盲女の帯につけた金子二両で彼女の菩提を弔った。女房は盲女を憐れみ、盲女の帯につけた金を着服しない善心によって、天道から福報を受けた。この話の中には、戦乱について、

永禄ほしん戊辰十二月に、武田信玄軍兵をそつして駿州におもむき、今川氏真

を、びやか^{じようか}し、城下の民屋を焼たて氏真^{おひおと}を追落^{すんぶ}して駿府をうばひとり給へり。城下の諸民あはてふためき、資財・雑具をとりはこび、我さきにとにげまどふ。その間に大軍をし来り、家へにこみいり、財物をかすめ^{おち}落^{うと}人^{うと}をうちふせ、はぎ取、手にもちたる物みなうばひ、切たをし追をとし、男女なきさけ^{をととき}音^{くわ}聞の声に和して、天地もくづる、ばかり也。

と、戦火によって日常生活を奪われる人々の痛ましい有様が描かれている。原典『五朝小説』所収『茅亭客話』の「庚子部天兵討益部賊云々」も官軍が逆賊を攻める戦乱に触れているが、「主帥城中ノ民ヲ愍ミテ、便チ招誘シテ城ヲ出ダシ、大軍^{はじめ}方^{そうほ}テ入テ搜捕シテ」^①とあるように、戦乱の痛ましさが見られない。また、盲女の家族の死について、巻十二の五に、

「このごろ父は三浦右衛門^{みうらう えもん}にくまる、事ありて、非分の科をかうふり、牢舎させられて、牢屋にして死す。母これをうらみて病つきて打つぎ死す。姉これをそだて侍べりしに、今度のみだれにながれ矢にあたりて死す。城をちてのちは一ぞくちりぢりになりて此むすめの事しるものなし。かゝるものを見すて侍べらば、^{みず(ママ)}溝^{うへしぬ}にたをれて飢死べし」とて、涙と共にいだきをこし、もとより^{やもめ}嬬^{らん}なり、乱にあふてあらゆる物みなうしなひ、此盲女をやしなふべき力はなけれ共、いとかはゆく、見すてがたく

とある。これは原典における「父ハ輪給^{およ}ノ迨^{より}バザルニ於テ、母ハ憂憤ニ於テ死ニ、^{あによめ}嫂^{えきふ}ハ役夫ヲ供給スルニ因テ流レヤニ中リテ斃レ、^{あた}兄^{たお}ハ城陥チテ存亡ヲ知ラズ、更ニ親戚ナシ」という内容を翻案したものである。本話巻十二の五と原典は両方とも戦乱によって家族が死んだことを描いている。ただし、原典における盲女の父は資財の運送に遅れるという罪によって死んだが、本話のほうでは父が権力者に無実の罪を着せられて死んだとされており、またやもめの女房の乱世における生活苦が示されている。

四. まとめ——『伽婢子』における〈批判〉の独自性

上述のように、巻六の三と巻十二の五では、武田信玄が戦乱を起したために、宮木野夫婦は死別することとなり、盲女は家族に死なれて頼りない身の上になり、やもめの女房は生計に苦しみ、人々は不幸な運命を辿った。了意は典拠の翻案を通して、戦乱に巻き込まれて不幸になった人々の境遇に対する同情を示し、戦乱を起した武田信玄を批判している。武田信玄だけでなく、『伽婢子』には外の戦国武将へのマイナスの視点も窺える。例えば、巻四の四「入棺之尸甦怪」における大内義隆と足利義輝、巻六の二「長生の道士」における里見義広、巻七の三「飛加藤」における長尾謙信、巻八の五「屏風の絵の人形躍歌」における細川政元、巻十二の三「厚狭応報」における陶晴賢への批判などである。巻一の一「竜宮の上棟」の主人公真上阿祇奈君も戦乱のために、才能が発揮できず、宮中を去ったのである。ここでは、戦乱を引き起こして、世を乱す人が誰であるかと特に限定されていないが、恐らく武田信玄のような戦国時代の権力者だと想像できるだろう。武田信玄は世を乱す戦国武将の一人として、了意に批判されている。言い換えれば、武田信玄への批判から、「竜宮の上棟」においても、戦乱を起して人々を不幸な窮地に追い込む権力者に対する批判が読み取れる。

また、「竜宮の上棟」における異界の扱い方にも注意すべきである。現実社会で才能に応じて立身出世できない主人公は竜宮で才能が認められ、竜王に厚くもてなされた。竜宮が現実社会（人間界）と対置され、人間界でできないことが異界で実現できる。異界における秩序は、道徳的で、寛容で、人の才能を認める。これは乱れている人間界の秩序より優れている。浅井了意は竜宮という理想郷を作り、理想郷における社会秩序への憧れを示している。ただ、「竜宮の上棟」の竜宮見物の場面で、異界の力について、

若つよく打なれば、人間界の山川・谷・^{ひらち}平地・^{ふるひなり}震鳴はためき、人みな
きをうしなひいのちをほろぼし、死なずとも耳をうしなはん。これは雷

公のつゞみ也（中略）是は^{こうう みづがめ}洪水の瓶なり。此^は筈にひたしてつよくうちふらば、人間世界は^{たいう こうずい}大雨洪水をしながら、山も^はひたり、^{くが}陸は海にぞなるなむ。
（傍線は発表者）

と書いてあることには注意が必要である。これは『金鰲新話』の「龍宮赴宴録」における「若し一たび撃てば則ち百物皆震う。即ち雷公の鼓なり（中略）若し一洒すれば則ち洪水滂沱として、山を懐にして陵に襄る（若一撃、則百物皆震、即雷公之鼓也（中略）若一灑、洪水滂沱、懐山襄陵）」という内容を翻案したものである。比べて見ると、「竜宮の上棟」では、「人間界」、「人みな」「人間世界」などの表現を通して、異界の人間界に対する破壊力をさりげなく示している。

自然（雷、洪水など）の力は異界のみに備わっていて、人間界は異界に及ばないが、人間界の権力者が権力を正しく行使すれば、現実社会が竜宮のような、戦乱のない、才能を適切に発揮すれば立身出世できるよりよい社会になるだろう、という了意の期待が窺える。発表者は、巻一の一「竜宮の上棟」からは張龍妹氏が指摘した文章道の衰退への批判は読み取れないと考える。『剪灯新話』と『金鰲新話』に比べて、「竜宮の上棟」には現実批判が含まれないように見えるが、実は了意独自の〈批判〉意識、戦乱を起す権力者たちへの批判が見られ、了意のよりよい社会への希求が込められている。

【注】

- ①張龍妹「東アジアにおける『剪灯新話』の受容——文人意識の継承と変質」（小峯和明編『漢文化圏の説話世界』所収 竹林舎 2010年4月）
- ②松田修『新版 日本近世文学の成立——異端の系譜——』第Ⅱ部第二章「『浮世物語』の挫折——仮名草子における批判的リアリズム」法政大学出版社 1982年7月
- ③花田富二夫『仮名草子研究 説話とその周辺』第二部第一章「警世・批評の文学」二「伽婢子の批判性——原話離れを中心に——」新典社 2003年9月
- ④本文の引用は新大系本『伽婢子』付録『剪灯新話句解』による。
- ⑤「竜蟠虎踞」という表現が帝王の場所を指すために、朱元璋の禁忌に触れた。注1張龍妹氏の論文によると、その上梁文は残されていないが、地方誌『元和唯亭志』にその片鱗が見られるという。『元和唯亭志』十三巻に「観欲徙郡治于子城、啓為作上梁文、有「竜蟠虎踞」語」とある。

- ⑥本文と書き下し文の引用は早川智美『金鰲新話訳注と研究』和泉書院 2009年6月 による。
- ⑦趙賢姬「『剪灯新話』の「人鬼交欲譚」をめぐって——金鰲新話・仮名草子・雨月物語の比較」『文学・語学』第176号 2003年5月
- ⑧蘇仁鎬（山田恭子訳）「『金鰲新話』の創作背景と小説史的 성격」『朝鮮学報』第196号 2005年7月
- ⑨本文の引用は松田修（ほか）校注『新日本古典文学大系』75・『伽婢子』岩波書店 2001年 による。
- ⑩江本裕校訂 東洋文庫本『伽婢子』解説 平凡社 1988年2月
- ⑪書き下しは渡辺守邦「『五朝小説』と『伽婢子』」（一～四）（『実践国文学』70～73巻）による。

* 討議要旨

鈴木淳氏は、『剪灯新話』から文人意識に対する批判を読みとることができる（発表資料一枚目）との意見をふまえ、浅井了意の『伽婢子』には文人意識が見られるのかと質問した。それに対し発表者は、浅井了意のころは文人が主に儒学者を指すので、彼の作品に文人意識を求めることはできないと考えている、と述べた。中嶋隆氏は、花田富二夫氏が「当時の一般的な認識」とまとめた、浅井了意の漠然とした批判性を詳しく考察すべきであると助言した。続けて中嶋氏は、『伽婢子』から武田信玄への批判を読み取ることができる、という発表者の見方に関して、近世初期に刊行された『甲陽軍艦』で武田信玄が理想化されていたのに対し、あえて『伽婢子』では信玄を悪者として書いた点に了意のある意識が働いているのではとの見解を提示した。さらに氏は、先の討議にあったように、了意がいわゆる中国の文人意識を理解していたとは思わないが、知識人として漠然と侍に対立意識をもっていたことだろう、と述べた。